

會 長 講 演

第 21 卷 第 2 號 昭和 10 年 2 月

土 木 技 術 者 の 社 會 的 地 位

(昭和 10 年 2 月 15 日土木學會通常總會に於て)

會 長 工 學 博 士 久 保 田 敬 一

On the Social Position of Engineers

By Keiiti Kubota, Dr. Eng., President.

内 容 梗 概

本文は土木技術者の社會的地位の現状と之に對する技術者の態度に關し著者の意見を述べたものである。

會長は總會に於て講演を爲すべきことは、本會創立以來規則に規定せられてあつたことであるが、一昨年定款及規則改正の際、此の明文は規則から削除せられた。然し是れは永い年月の間には已むを得ざる事故の爲に會長が講演を爲し得ざる様な場合も起るであらうし、斯る事を規則を以て束縛するのは不適當であると云ふ様な考慮からの事であつて、決して“會長は講演を爲さざるを得”と云ふ様な意味ではないと承知して居る。英國、米國其の他の諸外國に於ても學會の會長は講演を爲すのを通例として居る。これは學會の使命から云つても亦會長たる地位から云つても然もあるべき事であると考へる。

扱吾が土木學會に於ては初代の古市會長以來歴代會長は例外なく總會で講演せられ、偶々其の當日在京せられなかつた會長は講演原稿を送つて之れを代讀させて迄忠實に此の規則なり慣例なりを守られたと記憶する。然るに偶然にも此の規定が削除せられて後第 1 回の會長眞田博士が誠に已むを得ざる事故の爲に講演をせられなかつた。私は其後を承くる第 2 世であるから若し私が今回の總會で講演を爲さなかつたならば、規則が改正せられた結果、會長講演は廢止となつたと誤解せらるゝ處は多分にある。私が講演を爲すと爲さざるとによつて、此の傳統的光輝ある然も學會としては必要缺くべからざる會長講演が存續か、中絶かの岐路に立つと思へば不敏な私と雖も奮然起つて其の永久存續の爲に闘はざるを得ないのである。

所で私は昨年就任の當時も申上げて置いた通り、從來歴代會長が學識徳望共に高く土木學界の儀表であるが故に會長に推されたのとは其の趣を異にし、昨年は恰も本會創立 20 周年に相當するので記念事業等の事務が繁多である等の特別の事情の爲に選任せられた會長である。従て堂々たる會長講演をなすには最も不適任者であることは自分にも充分承知して居るのであるが、然し前述の如き事情の下に所謂“繋ぎ”の講演をなすのであるから之れを聴く會員諸君には誠に御迷惑の事とは思ふが、幸ひ今回新會長には青山内務技監が就任せられたのであるから、幸ひにして今年の私の“繋ぎ”の講演が効果を奏し、青山新會長が來年の總會に於て會長講演をせらるゝ場合には、夫れこそ現職の土木技術界に於ける總大將として心ゆく許りの講演を満喫することが出来ることゝ今から期待して居る次第である。

私の本日の講演の目的は以上で殆ど盡きて居るのであるが尙聊か蛇足を加へて見たいと思ふのは、技術者殊に土木技術者の社會に於ける地位と之れに對する吾々の態度である。

由來技術者は社會的に“下積み”である様に思はれる。電車の中で車掌と運轉手の札を掛ける時には、地位給

料の如何に拘らず必ず車掌の札を上位に掛けるのも、其一つの表現である。官界に於ては最も甚しく、技術者にして局長級以上のものは内務技監の外、鐵道省に 4 局長と遞信省の工務局長及海軍省の建築局長とを數ふるのみで、其の他は内務省の土木局長さへも事務官を以て充てられて居るのである。特に滑稽なのは内務技監は官等俸給共内務次官と同等なるに拘らず、社會的には土木局長の部下の如く取扱はれて居る。現に嘗て沖野前會長が内務技監の時新聞に“小橋土木局長沖野技監を隨へて出張した”と書いてあつたので頗る滑稽だと笑つた事もある。

官界のみならず實業界に於ても亦然りで、或る大會社にては技術者は絶対に重役にしないと云つて居る所さへあるとの事である。私は鐵道以外の事には詳しくないが、例へば鐵道に於ても初期時代の建設専門であつた時は技術者全勢で主腦部は悉く技術者である。段々建設線が竣工して營業線が出来て來ても初めの間は從來の餘勢で本省の幹部を始め地方鐵道局長も技術者が多きを占め、建設戦場の古ツワモノとして大に權勢を張つたものである。追々に營業線が増し今日では國有鐵道は大體營業線で建設の如きは、其の極小部分に過ぎざる有様になつては技術者も其の勢漸く衰へ、僅かに本省の 4 局長と地方鐵道局長の椅子の 1, 2 を保つか保たぬかになつたのも時勢の然らしむる所と云ふの外ないのである。

歐米諸外國に就て之れを觀るに技術者の地位斯の如く低きものではない様である。英國にては技術者にて爵位勳章の榮を受くるもの多く、佛國にては技術者の社會的地位頗る高く、獨逸にては官界主腦部に技術者頗る多く、米國にては實業界に雄飛するもの技術者が實に大半を占むる有様である。

此等諸外國に比して吾國の技術者の社會的地位の頗る劣れることは種々の原因があると思はれる。封建時代の土農工商の順で技術者を卑めた餘風は其の 1 である、吾國が明治維新以來今日迄全然官尊民卑で所謂治者に非ざれば人に非ざる有様である以上は技術者が事務者に押さるゝのは必然の結果である。又實業界に於ても大勢が販賣競争であつて生産競争に非ざる時代には眞面目なる技術者よりは華かなる事務者が歓迎せらるゝのは已を得ない事である。

然し吾々技術者としては此の境遇に甘んじ得ない色々の不平がある。第一人間としては技術者と事務者と優劣はない譯である、否中學を出て高等學校に入る際の事を考へると、自分は頭が悪いから文科は出来ぬ故理科に入つたと云ふ人は極少數で、數學が出来ぬから到底理科には入れぬと云ふて文科に走つた人が多數である。それが同じ年數を経て大學を卒業した後は理科出身者は文科出身者の下風に立たねばならぬとは心外である、又吾々技術者の怨目から云へば事務者の仕事は大抵技術者にも出来るが、技術者の仕事は事務者には出来ぬ事が多い。故に若し技術者にして相當の事務的の手腕を持つならば夫れこそ鬼に金棒で重寶此の上ないものとなるのである。米國の實業界の大立物たる技術者は實に是であつて、吾國に於ても此の種の人は屢々見受けるのである。故仙石前會長の如く政治上に頭角を表はした人もある、故團琢磨男の如く實業界に手腕を揮つた人もある、又故古市博士の如く社會一般から尊重せられた人もある。

斯く吾が技術者にして社會的に傑出せる人々が漸次増加すると同時に前述の社會的事情も漸く變改を見、官界に對する民間勢力の比率も漸々増加し、販賣至上政策も生産第 1 主義と變化しつゝある今日に於ては技術者の社會的地位も亦從て變改を見るに至るべきは必然であるから、今後の技術者の社會的地位に關しては強ち悲觀のみに傾くべきものでもない様に思はれる。現に社會の上層に於てはまだ技術者優遇の實は現はれぬにしても、中以下の階級に於ては已に其發芽の徴を見るのである。近年技術者の就職率が事務者に比し著しく好轉したる如きは其の一つの表現であると思はれる。

是に關して吾人の最も力強く感ずることは吾々技術者が今日迄社會に對して爲したる投資である、今日迄技術

者が不遇なる社會的地位に甘んじつゝ我々として務め國家國民に捧げたる所は實に大なるものがある。今日吾國に於ける文化的施設の大部分は技術者の手に成れるものである、昨年本會 20 周年祝賀會の席上で三邊文部次官は土木技術者の社會に盡せる功績の一例として、最近殊に私共の感謝に堪へません事は昭和 7 年地方農村が非常に窮乏致しました時政府に於きましても時局匡救の種々の施設を講ぜられたのでありますが、何と申しましても其當時土木事業を各地方に施行すると云ふ事が所謂時局匡救の最も重要な眼目であつたと心得るのであります、これが豫期通りの結果を擧げまして地方民心の安定を得たと云ふことは争はれない事實であると思ふのであります、土木學會御關係の方々の御苦心御功績は永久に忘るゝことの出来ない事柄であると思ふのであります”と述べて居らるゝ(三邊次官は當時の内務省土木局長である)。此の 1 例を以てしても技術者が治國平天下に大いに貢獻して居ることが知らるゝのである。斯る純潔にして且巨大なる投資が結局“物を言はず”に終るとは如何にしても信ぜられぬのである。

技術者の地位向上に就ては吾々の仲間に色々の叫び聲があり又運動がある。勿論技術者の地位向上は吾々の寸時も忘れ得ない所であり又不斷の努力を要する所であるが、時と勢に抗することは至難で成り難く時と勢を利用するこそ最も容易に成功する捷徑であると思ふ。

吾人が最も務むべき所は猛運動によりて遮二無二に優越の地位を獲得することに非ずして、技術者の社會的地位を自動的に向上せしむべき基礎工作をなすことが最も肝要である。

是に關聯して私の乏しき経験より 2, 3 の忠言を爲すならば第 1 は技術者は一般に“引き込み思案”に過ぐる様である“ジミ”であるのが技術者の本領であるのみ思ひ込んで勉強と仕事の外には何事をも顧みないのは誠に結構ではあるが、慾を云へば今少し積極的に活動する人が増す方が望ましいと思ふ。徒に宣傳をなすのは不可であるが自分の仕事を講演なり、論文なりにて發表するは何等不可なることはないのか却て非常に有益なる場合が多いのである。近來は土木學會誌の論文も毎號載せ切れぬ位提出せらるゝ相であるが内部のみならず、外部に對してもあらゆる機会を捉へて吾人技術者の仕事を披露することは社會をして技術者を正當に認識せしむる上からも最も肝要なことであると思ふ。尙一つの缺點は技術者は一般に社交的ならざることである、勿論華美輕薄は技術者として最も忌むべきことであるが、從來技術者特に土木技術者は餘りにも一隅に局踞して居つたのではなからうか、私は鐵道省に在ても常に技術者は今少し社交的に事務者と接近すべきものであると思つて自分の出来る範圍では其の注意を怠らなかつた積りである。其の他の官界及實業界に於ても技術者が外部の人と緊密なる接觸を保てば、相互に利益する所多く、殊に技術者の立場を認識せしむる上に大いに役立つことと信ずるのである。“人事を盡して天命を待つ”の金言は此處にも“ピッタリ”當て嵌まるのであつて、自ら其の道を盡さずして技術者の重用せられざるを悲むのは吾人の採らざる所である。宜しく大いに奮勵して技術に精進すると同時に技術者の地位向上に對しても大いに積極的に邁進すべきであると思ふ。(終)